

特別講演 2

演題名	「死ぬことと、生きることは同じ ～夫・金子哲雄の闘病と死に併走して～」
-----	-------------------------------------

講演概要

私は、2009 年の年末に父を、2012 年の秋に流通ジャーナリストだった夫の金子哲雄を、それぞれ家で看取りました。二人とも在宅医療を受けながら、そのまま自宅で死を迎えることになったのです。

しかし、最初の父の時の経験がなければ、夫を家で看取ることはできなかったと思っています。なぜなら、それほどまでに患者と患者家族にとって病気は突然起こるものであり、さらに闘病中であっても、その悪化さえ唐突なことでした。また、在宅医療を受けるということのハードルは、医療従事者でも福祉関係者でもない、私たちのような一般の人間にはとても高いものでもありました。

私たちが幸せだったのは、在宅医療を担うお医者さまと看護師さんが非常に優秀であり、夫や私のことを十分に理解してくださって、適切な支援をしていただけたからだと思っています。確定診断の時から、事実上の打つ手なしと言われ、緩和ケア外来の受診を勧められましたが、偶然が重なって、看取りをしてくださったこのお医者さまと看護師さんに出会うことができました。

病気が発覚した直後から「死」が明確に視野に入っている中で、かなり早い段階から、夫は病気を隠し仕事を続ける意思を固めました。しかし、「死にたくない」という気持ちと「死んでもいい」という気持ちの間を激しく揺れ動きながら、闘病と仕事との両立に苦しむことになります。

その激しい心の揺れ動きに、絶妙な距離を保ってプロフェッショナルとして伴走してくれた看護師さん、そして「話すだけでほっとする」と夫が言うほどに、深いコミュニケーションで信頼関係を築いてくださったお医者さま。彼らに助けられて、夫の金子哲雄がどのように変わっていったのか、そして、夫や私からは、彼ら医療者がどのように見えていたのか、夫の闘病とその死に寄り添った経験からお話したいと思います。

夫は、生きることと同じように、「死ぬこと」にも一生懸命に取り組むことができました。さらに、一度危篤に陥りましたが、医学的には説明のつかない回復の後、この世の最後となる仕事に取り組むことができました。在宅医療は、患者の「どのように死にたいのか」、すなわち「自分の命をどうしたいのか」という究極の希望を支えるものだ、私は確信しています。